

ロシア語名詞述語の意味的機能に関する一考察*

臼山利信

はじめに

いわゆる合成名詞述語において、動詞部分を連辞 *быть* が担い、かつ、名詞部分が名詞で表される場合、過去時制では主格形もしくは造格形を取ることが知られている。現代標準語においては、造格述語の優位性が指摘されているが、歴史的には、主格述語の出現が先で、造格述語が広く見られるようになったのは、比較的新しくほぼ17世紀半ば以降である(Патокова, 1-37; Шведова, 60-66)。

従来、この二つの述語形式の意味的な機能の相違を巡って様々な解釈がなされてきた。その多くの場合は、「恒常的特徴 *постоянный признак*」と「一時的特徴 *временный признак*」(Пешковский, 224; Булаховский, 237), 「本質的特徴 *существенный признак*」と「非本質的特徴 *несущественный признак*」(Буслаев, 264), 「絶対的特徴 *абсолютный признак*」と「相対的特徴 *относительный признак*」(Мазон, 364) などのように名詞成分に現れる意味ニュアンスの相違として捉えたものであった。中でも、Пешковский や Булаховский によって定式化された「主格述語は主語に立つ対象の恒常的特徴を表し、造格述語は一時的特徴を表す」という言説は、科学アカデミーの60年文法において採用され(Грамматика 60, 425), 一つの有力な解釈としてこれまで比較的広く受け入れられてきた。

しかしながら、実際に、この立場から無理なく解釈できる文例は、むしろ少ないようと思われる。

- (1) Он был студент МГУ.
- (2) Она была первоклассница.
- (3) В то время я был еще инженер.
- (4) Тогда мы с Мишой были друзья.
- (5) Данияр был коренным нашим земляком, уроженцем аила. (Айтматов)
- (6) Мужчина действительно был их отцом, но не тем, который растит

своих детей. (Ю. Цусима)

- (7) Лоуренс Аравийский был белым человеком, но тем не менее пользовался таким методом. (К. Оэ)
- (8) Михаил Ломоносов был основателем Московского университета.

例えば、文例(1)(2)は、専ら一時的な身分を表す述語名詞が主格に立つケースであり、文例(3)(4)は、主格述語が時の状況語と結び付いて一時的特徴を表すケースである。また文例(5)～(8)は、造格述語が一時的特徴を表しているとは思われないケースである。このような文例は例外的なケースではなく、文法的に違和感なく許容されるものである。こうした事情を考慮したためか、70年文法、80年文法等では、過去時制及び未来時制における主格と造格の選択の可能性を指摘しながらも、両者の機能的意味に明白な差異を認めず、造格述語の使用がより規範的であるとするに留まっている⁽¹⁾。

そこで本稿においては、名詞の主格述語及び造格述語の意味的機能に関する我々の仮説を提出し、その理論的な考察と具体例の解釈を通して一定の有効性を示すことを目標としたい。

1

上記文例の述語名詞はすべて人を表す名詞であるが、それらは基本的に次の三つのタイプに分けることができる。

- ① 時間の経過とともに自動的に別の属性へと移行するタイプ (→(1)「大学生」(2)「一年生」)
- ② 時間的経過において別の属性と交代する可能性があるタイプ (→(3)「技師」(4)「友人」)
- ③ 時間の経過に関係なくその属性が保持され続けるタイプ (→(5)「同郷人」(6)「父」(7)「白人」(8)「創立者」)

もし③のタイプの述語名詞が基本的に主格形を取り、①のタイプの述語名詞が造格形を取るのであれば、60年文法の解釈と符合するわけであるが、現実の使用では、いずれのタイプも主格形、造格形の双方ともに取ることができる。また②のタイプのように時間の経過とともに別の属性に変わる可能性のある名詞については、造格述語を用いた場合、確かに「一時的特徴」と結び付きやす

い傾向性は認められるように思われる。だが、(3)(4)のように主格述語が「一時的特徴」を表すことは容易にできるのである。したがって、名詞述語が「恒常的特徴」を表すか、「一時的特徴」を表すかという問題は、基本的には①、③のタイプのように名詞の語彙的性格によって決まるか、あるいは②のタイプのように文脈によって決まると考えられるわけである。

このように見てみると「恒常的特徴」を主格述語に、「一時的特徴」を造格述語に結び付ける理論的な根拠は原則的に存在しないということがわかる。私見では、60年文法に代表される解釈は主格述語と造格述語の意味的機能の本質そのものを説明したものではなく、その本質との結び付きやすさから生じたある種の傾向を捉えたものであると思われる。故に、主格述語と造格述語の意味的機能の本質は従来の見方とはまったく別の側面にあると考える必要がある。

2

そこで我々は、述語名詞に意味解釈の重心を置く従来の態度から離れ、主語名詞、連辞動詞、述語名詞を含む構文全体を視野に入れて、連辞構文の性格、主語名詞と述語名詞の語彙的意味、また両者の内的・論理的相関性、そして述語名詞の格機能の特性等を踏まえ、次のような仮説を立てた。

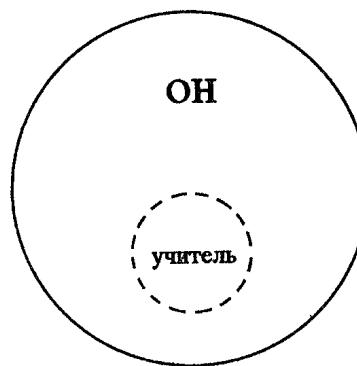
「主格述語の意味的機能の本質は、主語名詞の表す具体的指示対象と述語名詞の表す属性を同一格形式で結ぶ全面的提示機能にあり、一方、造格述語のそれは、主語名詞の表す具体的指示対象と述語名詞の表す属性を従属的な関係で結ぶ部分的提示機能にある」⁽²⁾

ここでこの仮説に到った経緯について少し説明したい。

(9) Он учитель.

文例(9)は、意味的に二通りの解釈が可能であると思われる。まず一つは、「彼は教師というカテゴリーに属する」という外延の広さ (*он <учитель*) からみた解釈である(図1)。もう一つは、「彼は教師という属性を有している」という解釈で、これは *он* そのものを属性の全体集合と捉え、述語 *учитель* をその中の一属性とみなす立場である(図2)。

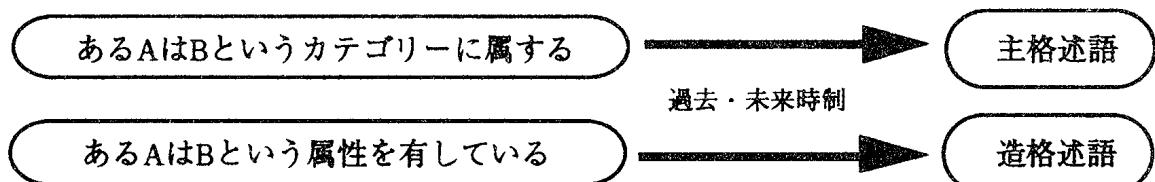
この二つの解釈の違いは、名詞成分の意味的な色合いに大きな差異となって

図1 *он*（被包摶者）と *учитель*（包摶特徴）の包摶関係図2 *он*（属性の全体集合）と *учитель*（一属性）の包含関係

現れる。この“Он учитель。”という文では、*он*が構文的には主語であると考えられるが、「彼は教師というカテゴリーに属する」と解釈される第一のケースでは、述語 *учитель* が主要成分となり、*он*が *учитель* であること自体何か価値を持つという発話状況が想定される。そして、ここでは主語である *он* の現実の様々な側面が述語 *учитель* によってその背後に覆い隠されてしまう、逆に言えば、主語 *он* の一属性である *учитель* を全面的に提示するという効果が生じる。その意味で述語成分 *учитель* は、文中において自立的な存在として機能している。それに対して「彼は教師という属性を有している」と解釈される第二のケースでは、*он*があくまでも主要成分であり、*учитель* 自体に何か特別な価値が置かれているわけではなく、*учитель*を*он*の単なる一つの属性として提示する発話状況が想定される。ここでは、*учитель*以外の *он* の現実の様々な側面が背後に押し隠されることはなく、*учитель*をはじめとする多種多様な属性を備えた存在として、*он*がそのまま提示されるという効果が生じる。その意味で、*учитель*は自立的ではなく、*он*に従属する副次的な成分として機能している。

我々はここで、現代ロシア語の現在時制においては、通常 “Он учитель.” という文の二つの意味解釈を可能にするような形態レベルでの文法表現形式は存在していない、それに対して過去時制、未来時制においてはそれが存在し、他ならぬ主格形と造格形がその文法形式に相当するのではないかと考えてみた。つまり、主語で表されるある特定の人間が過去において有していた属性の中の一つを、あるいは未来において有しているであろう属性の中の一つを全面的に提示するような場合には、主格述語を用い、部分的に提示するような場合には、造格述語を用いるのではないかと考えたのである⁽³⁾ (図 3)。

図3 意味解釈と格形式の相関の可能性



3

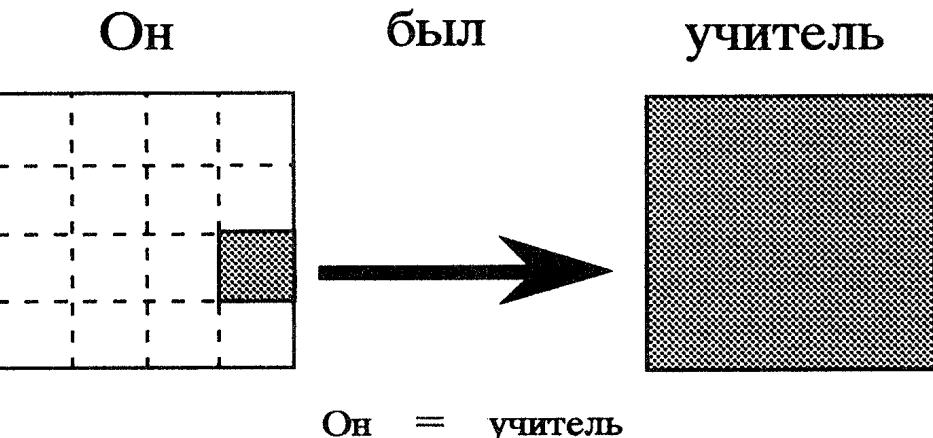
以上のことを踏まえ、上記仮説に基づいて、まず文例(9)の過去時制の場合を解釈してみることにする。

- (10a) Он был учитель.
(10b) Он был учителем.

(10a) の主語名詞 *он* というのは、話し手に特定されたある男性の人物を示している。そして、話し手はこの人物と何らかの関わりがあり、その意味で主語対象 *он* の様々な属性に関する過去のパースペクティブを自分なりに持っている。一方、*учитель* は *он* の過去における職種を示しているが、それは *он* の一つの属性にすぎない。しかしながら、主語名詞 *он* が連辞動詞 *был* を通じ、述語名詞 *учитель* が主格形で結ばれることによって、*учитель* 以外の *он* の属性はその背後へと押しやられ、結果として *учитель* という一属性のみが最前面に押し出されることになる(図4⁽⁴⁾)。したがって、(10a)では、過去における *он* の一側面を積極的に提示する話し手の強い主観性が表され、強調の効果を生むということになる。

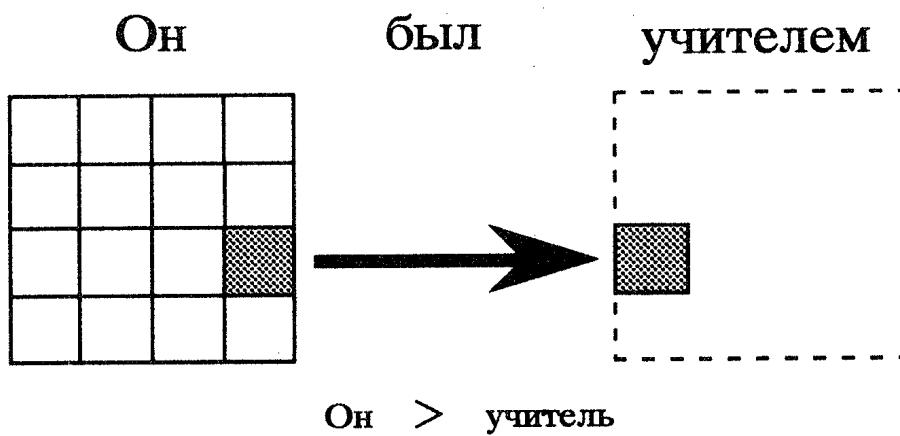
では、(10b)はどうであろうか。ここでは、造格述語 *учителем* は主語対象

図4 Nn—Vcop. past—Nn.



он の一つの属性を属性全体の一部分として表しているにすぎないで、
учитель 以外の он の属性がその背後へと押しやられることはなく、主語 он
は様々な属性を備えた存在としてそのまま提示される（図5）。故に、(10a)の
ように述語名詞が強調されるような効果は生じない。ここでは、 он とその一
属性である учитель との穏やかな従属的関係が示されているだけである。そ
の意味で、話し手は、過去における он の учитель という一つの側面を単なる
事実として客観的に示していると思われる。

図5 Nn—Vcop. past—Ni.



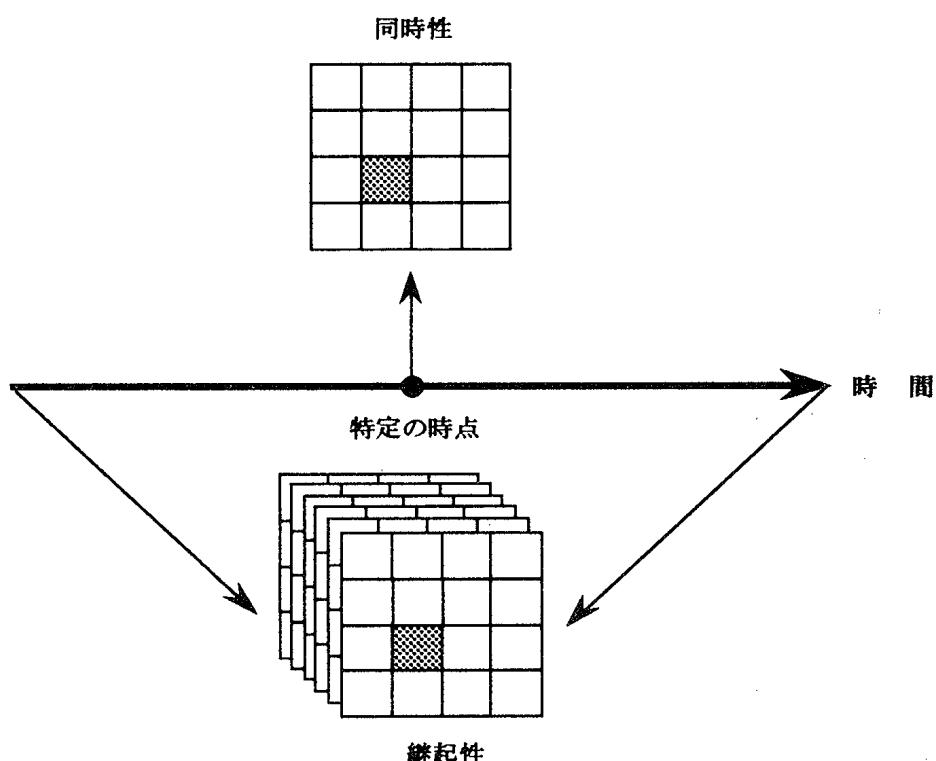
ところで、人間というのは、様々な側面から規定可能な各人各様の属性を
持っていると思われるが、理論的には、その属性全体を一つの集合と見做すこ
とができる⁽⁵⁾（図6）。そして、この属性集合は、さらに同時性と継起性とい
う二つの視点から捉えることが可能である⁽⁶⁾。すなわち、一つは、ある一時点
における固定された一定の属性集合、もう一つは、時間の経過とともに集合の

図6 人間存在の属性集合

属性集合: {a, b, c, d, e,}

構成メンバーに多少の変更が行われていく変動的な属性集合というものを考えるわけである（図7）。

図7 属性集合の同時性と継起性



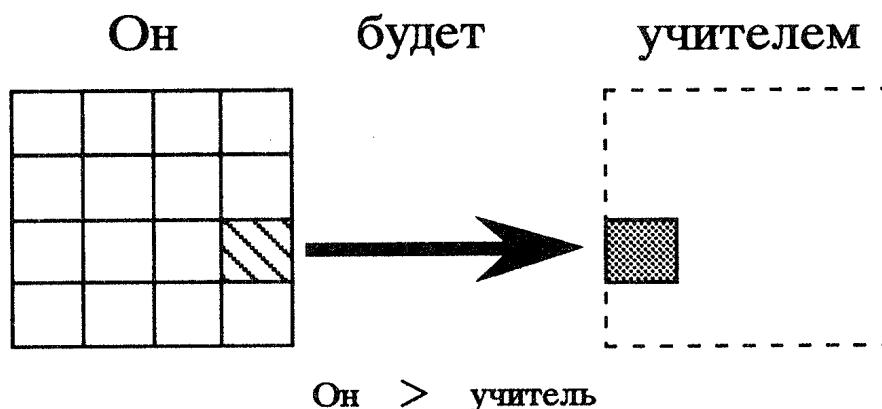
この二つの視点から再度(10a)(10b)を解釈してみると、これらの文例には文脈はないが、例えば、過去のある一時点を示す“*тогда*”という状況語が仮にある、あるいはなくともそれを示す文脈があると想定する。そうすると(10a)(10b)は、その“*тогда*”という時点における *он* の属性集合の一構成メンバーである *учитель* を全面的に提示するか、あるいは部分的に提示するかという違いとして区別される。逆に、もしそのような過去のある時点の属性ということが文脈に現れていない、あるいは文脈から判断できないような場合には、より長期的な時間スケールからみた *он* の変動的な属性集合の一構成メンバーである *учитель* を全面的に提示するか、あるいは部分的に提示するかという違いとして区別されるわけである。

それではさらに未来時制の文例に移ることにしよう。

- (11a) Он будет учитель.
 (11b) Он будет учителем.

現代ロシア語の未来時制では、文例(11b)のように通常名詞述語は造格形を取ることになっている。理論的には、図8のように未来において有しているであろう он の属性集合の一構成要素である *учитель* を部分的に提示していると解釈することができる。また、発話時における он の属性集合には、「教師」という属性は当然含まれていないが、条件的に備わった属性の萌芽は存在していると考えられる（例えば、教育学部の学生である、教員免許の取得を目指しているなど）。その意味では、話し手は未来における он の *учитель* という一つの属性を順調に事が進めば自動的に確保し得る可能性として客観的に示していると言える。

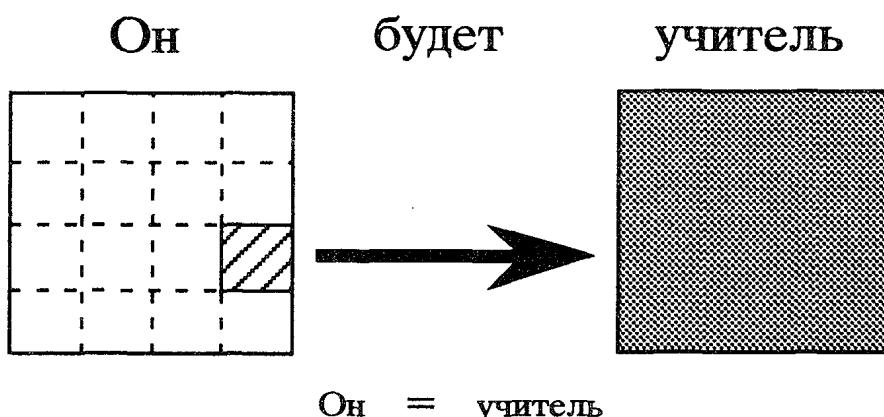
図8 Nn—Vcop. future—Ni.



一方、未来時制における主格述語は、傾向としてあまり使用されないだけで決して非文というわけではない。文例(11a)はその主格述語が用いられているケースであるが、主語 он の一属性である *учитель* が主格形で置かれる結果、それ以外の он の様々な属性は脇へと追いやられ、まだ実現されていない、しかも実現しない可能性を孕んだ、未来における *учитель* という属性が全面的に押し出されることになる（図9）。そのために *учитель* という一属性を最大に強調する効果を生み出し、「彼は必ず教師になるだろう」という将来の実現性に対する話し手の強い確信が表明されることになると思われる。ただ発話時における он の属性の萌芽は、(11b)の場合とは質的に異なり、単に条件的に備わっているものを指しているわけではない。ここでは、むしろ он 自身が本

來的に有している資質、あるいは素養といったものが話し手の念頭に置かれていると思われる⁽⁷⁾。

図9 Nn—Vcop. future—Nn.



4

以上、上記仮説に基づいて、過去時制および未来時制の文例を理論的な側面から検討してきた。次に文学作品の中から具体的なコンテキストを含んだ文例をいくつか取り上げてみたい⁽⁸⁾。

(12) Куниэ воспитывалась в совершенно особом, замкнутом мире семьи слепого придворного музыканта, имеющего ранг Великого Кэнгё, и только когда ее полюбил мужчина, свободный от предрассудков востока, у нее открылись глаза. Во всяком случае, так ей самой казалось.

Джордж был американцем второго поколения и выглядел как типичный янки, если не считать разреза глаз и цвета кожи. Ему оттого и удалось покорить Куниэ, что он не слишком ценил ее родовые корни, приводившие в благоговейный трепет слабохарактерных японских юношей. А потому, когда отец в гневе бросил ей в лицо: «Неужели ты выйдешь за этого волосатого варвара?», Куниэ только укрепилась в своем чувстве. (Савако Ариёси. Старинная песня)

(13) Сэцуко остановилась перед храмом и долго любовалась его неповторимой архитектурой. Любовь к древним храмам привил ей покойный дядя, Кэнъитиро Ногами младший брат матери. Он был

дипломатом а), во время войны занимал пост первого секретаря в японском представительстве в одной нейтральной стране и перед самым концом внезапно там заболел и умер.

Сэцуко помнила, что мать страшно горевала и удивлялась как это могло случиться—ведь Кэнъитиро был такой здоровый мужчина. б) И теперь, как только она вспоминала дядю, в ее памяти всплывали эти слова матери.

В самом деле, Ногами был удивительно здоровым человеком, с) занимался дзюдо еще в средней школе, а в университете уже имел третий дан. Он выехал из Японии к месту назначения, когда война была в самом разгаре. Сэцуко с матерью приехали проводить его на токийский вокзал. Вокзал был едва освещен: власти ввели правила светомаскировки. (Сэйтё Мапумото. Земля—Пустыня)

(14) —Господин Тэрадзима дослужился до посланника, и очень жаль, что он умер так рано, ведь его ожидала блестящая карьера. Я слышал, будто он умер сразу по окончании войны. Должно быть, не перенес поражения Японии.

—Может быть, может быть,—пробормотал мужчина.

—жаль, говорят, он был очень способный дипломат. Навряд ли тут появится еще когда-нибудь такой выдающийся человек.

Мужчина согласно кивнул головой. (Сэйтё Мацумото. Земля—Пустыня)

(12)(13)(14)は、過去時制の文例であるが、まず(12)は、日系アメリカ人二世の譲治と結婚したために大検校の老父から勘当されるに到った娘邦枝の心理描写がなされている地の文で、「二世」という名詞句が造格になっている。ここでは譲治の「二世」という一つの属性があくまでも一属性として客観的に提示されないと見做され、この文において強調のような効果は全く感じられない。

次の(13)も地の文であるが、ここでは奈良の唐招提寺を訪れた節子の死んだ叔父顕一郎についての回想とその人物描写がなされている。まず下線部a)は、在外公館の一等書記官として任務を全うし、他界した顕一郎の外交官という一つの属性を造格述語によって部分的に提示していると解釈され、(12)と同様に感情を抑えた語り手の客観的な記述となっている。それに対して下線部b)は、節

子の母自身のことばであるが、主格述語が用いられることにより、「頑丈な身体の人」という顕一郎の別のもう一つの属性が最前面に押し出され、その属性が強調される効果が生じ、節子の母の強い主観性が込められた表現になっている。そして下線部c)では、語り手が顕一郎のその偉丈夫な側面を造格形で再度表現することによって節子の母の発言が単なる主観ではなく、客観的な事実であったということを示している。

文例(14)は、かつて顕一郎の上司であった寺島公使の墓参りに訪れた男にお寺の住職が同公使の話をしている場面であるが、その下線部では述語名詞が主格形で表されている。故に、同公使の一つの属性である способный дипломат が全面的に提示されると解釈される。ここでは、(13)の下線部a)の造格述語の場合とは対照的に、公使の他の属性についてはほとんど何も関知していないとはいえ、話し手である住職の側からの主観的な評価がはっきりと感じられる。

次に未来時制の文例を見てみる。

- (15) —Ну поверьте же мне! Не я это сделала! —голос женщины пресекался от напряжения. Кирико кивнула, и женщина, увидев это, широко раскрыла глаза.
- Если меня заподозрят, прошу вас быть свидетельницей,—она потрясла Кирико за плечо.
- Вот не повезло! Я пришла, к несчастью, сразу же после убийцы. Только вы можете меня спасти. Скажите непременно, как вас зовут. Запах крови смешивался с запахом дорогих духов, исходивших от этой женщины.
- Скажу я вам свое имя. И свидетельницей буду, —наконец заговорила Кирико. (Сэйтё Мацумото. Флаг в тумане)
- (16) —Тут она у меня совсем как вы,—подтвердил Хагиока. —Готова возиться с собаками, с кошками, с птичками. Мыши нас на кухне донимают, так она не дает их травить. Знаешь, по-моему, у тебя эта страсть еще сильнее, чем у Хирасэ-сан.
- А что, я люблю, когда мышки шуршат, они славные.
- Вот я и говорю: значит, вы добрая. Это вообще так: если женщина животных не любит, то ничего хорошего от нее не жди. —И Хирасэ опять принялся уговаривать гостей заняться лисоводством: у вас-де

такая супруга, замечательная будет помощница. (Яэко Ногами.
Лисы)

文例(15)は、殺人直後の現場に立っていた女とそこにあとから来た桐子との対話であるが、下線部のように桐子自身がその女の証人になると発言するところで造格形 *свидетельницей* が使われている。したがって、この文例は、現場に偶然立ち会わせたという桐子の証人としての前提条件のみを念頭に置いた発話であると考えられ、話し手である桐子は未来における自身の *свидетельница* という一属性をあくまでも単なる可能性として示しているにすぎないと解釈される。

それに対して文例(16)は、転地療養で東京の会社を退職し、田舎に移り住んだ萩岡夫婦にその土地の平瀬という男が狐飼いを勧める場面であるが、その下線部で萩岡の妻芳子について “замечательная будет помощница” と主格形で述べているように、*замечательная помощница* という芳子の未来における一つの属性を全面的に提示していると見做される。故に、ここでは、属性の萌芽として芳子が本来的に備えている資質が考慮され、単なる可能性としてではなく、「彼女ならば、間違ひなくすばらしい助手になるだろう」という平瀬の強い確信が現れていると思われる。

ところで、現代ロシア語の現在時制において、動詞 *быть* の現在形 *есть* は、連辞として様々な事象に定義を与えたり、あるいは一定の判断を示したりする場合などに用いられることがあるが、そのような場合にも、上記仮説を適用することができるようと思われる。

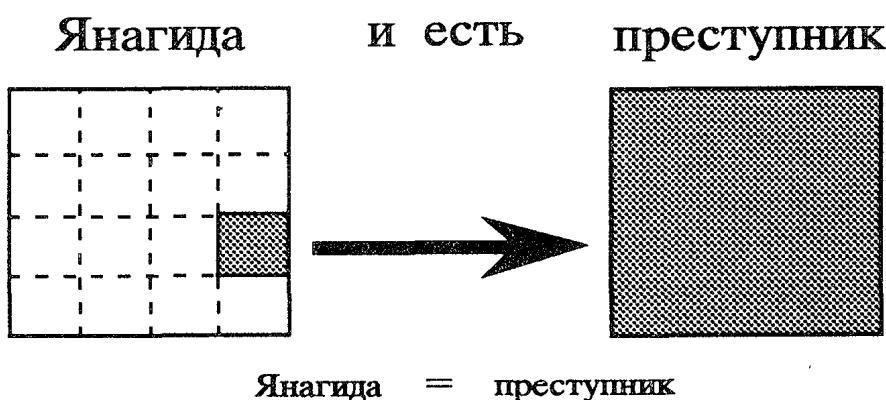
(17) Когда его вызвали на допрос в полицию, Янагида побледнел и задрожал. Побеседовав с ним, полицейские тайно взяли его отпечатки и сверили их с отпечатками на шкафу. Они полностью совпали. Было решено, что Янагида и есть преступник. Взяли ордер на арест и заключили его под стражу.

На следствии Янагида отрицал свою вину. (Сэйтё Мапумото. Флаг в тумане)

文例(17)は、老婆殺人事件の容疑者として逮捕された小学校教員の柳田正夫に関する新聞記事の文で、その下線部は警察当局の判断である。ここでは、図10

のように柳田の **преступник** という一属性を連辞動詞 **есть** を通じて全面的に提示しており、「柳田が犯人以外の何者でもない」という捜査本部の強い確信・断定のニュアンスが現れている⁽⁹⁾。

図10 Nn—Vcop. present—Nn.



(18) В рукопожатии они ощутили сильную хватку пальцев друг друга и мгновение померились выдержкой.

—Ого, улыбнулся Цветухин, —Вы что, гимнастикой занимаетесь?

—Немножко... Я вас узнал, —вдруг покраснел Кирилл.

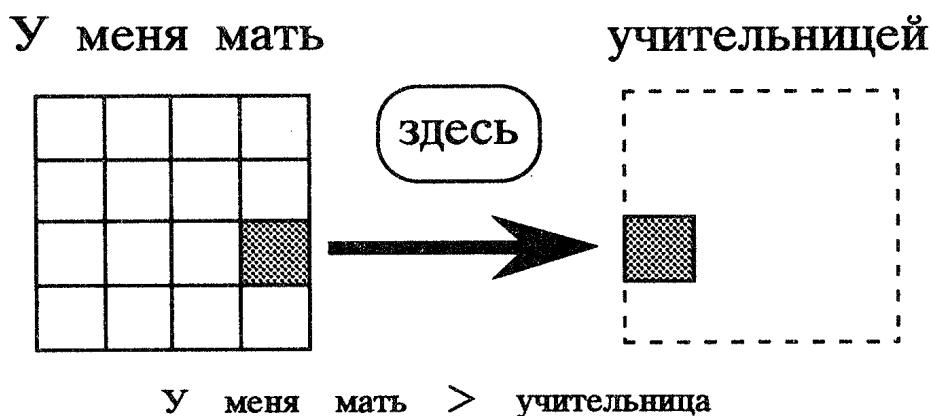
—Да? —полуспросил Егор Павлович с тем мимолетным по виду искренним недоумением, с каким актеры дивятся своей известности и которое должно означать — что же в них, в актерах, находят столь замечательного, что все их знают? —Вы поберегите девчоночку, покуда ей угрожает родитель, —с деликатностью переменил он разговор. —Славная девчоночка, правда?

—Я отведу ее к нам. У меня мать здесь учительницей. (Константин Федин. *Первые радости*)

また現在時制で連辞動詞がなくとも、特に口語では時間的限定、あるいは空間的限定を示す状況語を加えると、造格述語の使用が可能になることが一般に知られているが、ここでも仮説の適用が可能であるように思われる。例えば、文例(18)は、酒のみの父親につかまるまいと必死で逃げている幼い娘 *Аночка* を偶然目にし、小学校の中庭にこっそりと通して救ってやった技術専門校生キリルとやはり彼女を助けようと思っていた舞台俳優ツヴェトゥーヒンとの会話であるが、その下線部のキリルの発言は、その発話時点における彼の母親の一

定の属性集合の中の *учительница* という一つの属性を *здесь* という空間的な限定を与えることで、その属性が全面的にではなく、部分的に提示されると解釈することが可能なわけである⁽¹⁰⁾ (図11)。

図11 Nn—Adverb (time／place)—Ni.



おわりに

以上、人を表す名詞が主語と述語に立つケースに絞り、仮説に基づいて主格述語と造格述語の意味的機能の問題を検討してきたが、この仮説が名詞述語における意味的機能の相違を構造的に解釈する一つの説明として有効であることが示されたかと思われる。最後に本稿の考察から明らかにされた、名詞述語の二つの形式と、意味的機能、意味的評価、および意味的機能との結びつきやすさから生じる、傾向としての意味的特徴との関係を表で簡潔にまとめておく⁽¹¹⁾。

〈表〉

	意味的機能	意味的評価	傾向としての意味的特徴
名詞主格述語	全面的提示機能	主観的評価 (強調, 確信, 断定)	恒常的特徴, 本質的特徴, 絶対的特徴
名詞造格述語	部分的提示機能	客観的評価	一時的特徴, 非本質的特徴, 相対的特徴

尚、上記仮説が、現実の様々なテキストの中でどの程度まで適用可能かという問題については、幅広いテキスト素材から数多くの文例を抽出し、さらに詳細に検討する必要があるが、それは今後の課題としたい。

* 本稿は、1996年度日本ロシア文学会総会・研究発表会（10月19日、創価大学）において、同題目で行った口頭発表に加筆・修正を施したものである。また本稿は、日本学術振興会特別研究員制度及び平成8年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

注

- (1) 70年文法では、造格述語の *регулярность* (Грамматика 70, 585), 80年文法では, *обычность, нейтральность* (Грамматика 80, 283-284), アカデミア文法では, *литературность* が指摘されている (Академия, 722)。
- (2) 我々はすでに名詞述語の意味的機能について予備的な考察を行っているが、そこでは、「全面的同定機能」と「部分的同定機能」という用語を用いた (臼山, 109)。本稿では、米重文樹教授の貴重な御助言により、語中の「同定」を「提示」に改めた。
- (3) 主格述語と全面的提示機能の、また造格述語と部分的提示機能の論理的相関性について少し言及したい。主格形の最も重要な機能の一つは対象を直接的に名付ける「命名機能」であるが、ある意味ではその命名された名詞は、文における地位が示されていない「全体格」として、名称のカテゴリーとしての枠組み全体を捉えたものと見做すことができる。したがって、主格主語名詞と主格述語名詞を連辞動詞 *быть* の活用形で直接的に繋ぐことは、言わば自立的なカテゴリーである名称の枠組み全体同士を同等な関係で結ぶことになると思われる。一方、造格形は、連辞動詞 *быть* の活用形と造格述語名詞から成る合成名詞部分が「～としてある」と解釈されるような対象存在の様態を表す表現形式であると考えることができる。つまり、対象存在の様態というのは、主語対象に存する属性全体の一側面に他ならず、所与の属性を全体における一つの部分として示していると言えるわけである。ただし、この造格述語による部分性は、部分生格のそれとは質的に異なっている。基本的には、前者が属性の全体集合における部分集合としての部分性を表しているのに対して、後者はある全体量の中の一部不定量としての部分性を表していると思われる。尚、「命名機能」と「全体格」に関しては、Jakobson (1936/71) を参照。
- (4) 図4については、山口巖氏の御助言により、当初のものを一部改めた。
- (5) 浦井康男氏は、普通名詞の対象化と概念化 (浦井, 1976, 34-37) という観点から同定構文を解釈する独自のモデルを提出し、その中で対象化された人間を表す普通名詞が人間を示す概念の無限集合を持つことを指摘している (浦井, 1978, 5-7)。また、我々とは異なる視野から主格述語と造格述語の問題を詳細に検討している山口巖氏も、対象と対象を指示する概念の関係を集合として捉える見方を示している (山口, 107)。
- (6) 「継起性」という視点は米重教授の御教示による。
- (7) このように未来時制の主語名詞における所与の属性の萌芽は、造格述語の場合には、その属性を獲得するための一定の前提条件の保持を示しており、一方、主格述語の場合には、主語対象に本来的に備わっている、所与の属性に相応しい資質を指していると考えられる。
- (8) 文例は基本的に日本の文学作品のロシア語版から引用したものであるが、ロシア語として不自然であると感じられる箇所は別段見当たらず、また文体上の個性も翻訳者によって程よく抑制されているので、本稿の課題を検討するに際して、特に問題は生

じないと思われる。

- (9) ただし、この文例は、*и есть* の *и* を省くと非文になる（アレクサンドル・ディボフスキイ氏、森俊一氏の御教示による）。
- (10) インフォーマント（Минченко А. И., 44 года, актер, москвич）によれば、ここで造格の使用は *работает* の省略によるものと考えることもできるが、省略ではない口語文と見做すことも可能である。
- (11) 全面的提示機能および部分的提示機能から必然的に現れる主観的評価および客観的評価という意味的評価は、合成名辞述語の内的意味構造と外的機能を検討した米重教授の結論、すなわち、主格述語構文が「話し手によって与えられる世界」を表し、造格述語構文が「対象それ自体の与える世界」を表すという解釈（米重、1-13）と内容的基礎において完全に一致している。また、名詞述語における主格と造格の選択が主語名詞と述語名詞の語彙の意味容積の関係によって決まるという松川秀郎氏の説明は（松川、27-39）、我々の立場とは大きく異なるが、結果的には、論理的に主格述語が主観的評価を、造格述語が客観的評価を表すと解釈される点で共通しており、極めて示唆的である。

例文出典

Айтматов, Чингиз, *Джамиля*, Фрунзе, 1988.

Круги на воде, Антология современной женской прозы Японии, Сборник, Перевод с японского, Составление и предисловие О. Морошкиной, М., 1993.

Мацумото Сэйтё, *Стена глаз*, Перевод с японского Б. Раскина и др., М., 1993.

Оэ Кэндзабуро, *Футбол 1860 года*, Перевод с японского В. С. Грибнина, М., 1983.

Федин, Константин, *Собрание сочинений в десяти томах*, т. 5, М., 1971.

引用文献

Академия (1979) = *Русская грамматика*, т. 2, Praha.

Булаховский, Л. А. (1937) *Курс русского литературного языка*, Изд. 2-е, исправленное и дополненное, Харьков.

Буслаев, Ф. И. (1869) *Историческая грамматика русского языка*, Изд. 3-е, исправленное и дополненное, Синтаксис, М.

Грамматика 60 (1960) = *Грамматика русского языка*, т. 2, ч. 1, Синтаксис, АН СССР, М.

Грамматика 70 (1970) = *Грамматика современного русского литературного языка*, АН СССР, М.

Грамматика 80 (1980) = *Русская грамматика*, т. 2, АН СССР, М.

Патокова, О. В. (1929-1930) “К истории развития творительного предикативного в русском литературном языке”, *SLAVIA*, VIII, с. 1-37.

Пешковский, А. М. (1914) *Русский синтаксис в научном освещении*, Популярный очерк, М.

Шведова, Н. Ю. (1964) “Изменения в соотношениях именительного и творительного предикативного”, *Очерки по исторической грамматике русского литературного*

языка XIX века, Изменения в системе простого исложненного предложения в русском литературном языке XIX века, М., с. 60-127.

Jakobson, R. (1936/71) "Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre", *Selected Writings*, vol. 2, Word and Language, The Hague—Paris, pp. 23-71. (邦訳：米重文樹, 「一般格理論への貢献」, 服部四郎編「ローマン・ヤコブソン選集1」に収録)

Mazon, A. (1937) L'attribut en russe littéraire moderne, *Зборник у част А. Белића*, Београд, 1937, с. 364-371.

臼山利信 (1995) 「現代ロシア語における名詞の主格述語と造格述語の意味機能について—過去時制を中心にして—」, СЛАВИАНА, No. 10, 東京外国語大学スラブ系言語・文化研究会, pp. 103-123.

浦井康男 (1976) 「普通名詞の特異性—述語の場合—」, 『ロシア語ロシア文学研究』第7号, 日本ロシア文学会, pp. 34-47.

浦井康男 (1978) 「比較の統辞論的構造について」, 『ロシア語ロシア文学研究』第9号, 日本ロシア文学会, pp. 1-11.

松川秀郎 (1978) 「現代ロシア語における主格客語と造格客語について」, 『神戸外大論叢』第29巻, 第2号, 神戸市外国語大学研究所, pp. 19-39.

山口巖 (1982) 「造格の機能といわゆる叙述の造格について」, 『人文』第28集, 京都大学教養学部, pp. 91-116.

米重文樹 (1988) 「背景と風景—合成名詞述語についての一考察—」, 『ロシア語ロシア文学研究』第20号, 日本ロシア文学会, pp. 1-13.

К вопросу о семантических функциях именительного и творительного предикативного имен существительных в современном русском языке

Тосинобу УСУЯМА

Как известно, когда в т. н. именном составном сказуемом глагольная часть является прошедшей формой связки "быть", а именная часть—именем существительным, то имеется возможность выбора двух вариантов падежной формы: именительный или творительный падеж. В современном литературном языке замечается преобладание употребления творительного предикативного (ТП) над именительным (ИП). А с исторической точки зрения ИП появился раньше, чем ТП, а ТП представляет собой сравнительно новое явление и начался широко распространяться примерно со второй половины 17 века.

До сих пор многими исследователями рассматривались различия семантических

функций между двумя формами сказуемого. Во многих случаях названные различия воспринимали как разницу семантических признаков, появляющихся в компонентах имен существительных: постоянный/временный, существенный/несущественный, абсолютный/относительный и т. п.

Но в свете языкового употребления в действительности очень мало примеров, которые можно объяснить с указанных точек зрения. По нашему мнению прежние замечания обозначают не столько саму сущность семантических функций обеих форм предикатов, сколько некие тенденции, возникшие в именно связи с этой сущностью. Поэтому, принимая в расчет структуру данного типа предложения, а также такие факторы, как характерные черты связки, лексические значения подлежащего- и сказуемого-существительного, внутренне-логическую корреляцию между подлежащим и сказуемым, особенности падежных функций предикативного существительного и др., мы выдвинули следующую гипотезу: сущность семантической функции ИП заключается в функции общего представления, которая связывает по одинаковой падежной форме конкретный объект, выражаемый подлежащим-существительным, и его атрибут, выражаемый сказуемым-существительным. А сущность семантической функции ТП заключается в функции частичного представления, которая связывает в виде подчиненной связи конкретный объект, выражаемый подлежащим-существительным, и его атрибут, выражаемый сказуемым-существительным.

В результате подробного рассмотрения и анализа разных примеров в конкретном контексте наша гипотеза оказалась достаточно эффективной для объяснения разницы семантических функций между ИП и ТП во всех трех временах. Более того, оказалось, что можно объяснить логическую связь данной гипотезы с прежними положениями. Если показать соотношения между двумя формами предикативных существительных и семантическими функциями, оценками и признаками в виде тенденций, то получается следующая таблица:

	семантическая функция	семантическая оценка	семантические признаки в виде тенденции
ИП	общее представление	субъективная оценка	«постоянный» «существенный» «абсолютный»
ТП	частичное представление	объективная оценка	«временный» «несущественный» «относительный»